

# 日本経済新聞

夕刊  
12月17日  
(火曜日)

## 酒造りと佐渡の未来見つめて ②

おぼたるみこ  
尾畑 留美子さん  
尾畑酒造5代目蔵元

5歳年上の姉と2人姉妹家は酒蔵の一角にあり、酒造りは身近だった。仕込み時期の朝は「オー」という酒米を蒸す音で目が覚めました。蔵の中はうす暗く冷え冷えとして、でも何か神聖な感じがする場所でした。祖父が経営していたころは、日本酒は造れば売れる時代でした。昔の「旦那衆」らしく悠々と構えていた祖父と、バイオニア精神の塊で事業を大きくしようと思死だった父親は、殴り合いになるのではと心配するほどしょっちゅうケンカをしていました。



そんな2人の姿を見て、少しでも「緩衝材」になろうとしたのかも知れません。小学生のころ、祖父に「将来私が継ぐね」と言っていました。

幼児から小学生のころは、旅行作家の兼高かおるさんが案内役を務めるテレビ番組「兼高かおる世界の旅」の放送を毎週楽しみにしていました。佐渡は離島だからと、海に向こうに広がる大きな世界に憧れていたのだと思います。見たことのない国の人や文化にテレビや雑誌で触れ、ワクワクしていました。

蔵を継ぐべしと宣言して

## 離島に生まれ世界に憧れ ■ 映画配給会社で挑戦心培う



酒造りを身近に感じながら育った  
(母親に抱かれる尾畑さん⑥)

いたが、中学生の時に姉が結婚し継ぐことになった。家を継がない以上、自分の選択肢は外に出ることだと考えました。懸命に勉強し、通知表は体育以外ほぼ、最高評価を取るようになりました。大学は慶応義塾大学法学部に入学しました。佐渡出身と言ったたびに「たらい舟で渡れるの?」「自転車で一週でできるの?」などと聞かれたため、佐渡出身とは言わなくなりました。でも「新潟出身」と言うと、大抵「新潟のどこ?」と聞かれるのです。しかたなく佐渡と言つと、「おお〜」と歓声があがりました。田舎から来たという意味もあるのですが、それよりもみんなが知っていることがすごい。佐渡のインパクトは強烈だと感じました。

日本酒研究会という組織に所属し、他大学との「日本酒交流」という名の飲み会のほか、イベントの手伝いなどをしていました。ある日、利き酒大会があり「蔵元の娘なのだから、出てみなよ」と言われて出場しました。人生初の利き酒で高得点、特別賞を受賞し、テレビや雑誌でも紹介されびっくりしました。卒業後は映画配給会社の日本ヘラルド映画(当時)に宣伝担当で入社した。希望していたコンサルタント会社から内定をもらいました。ところがある日、学生部に行くとき映画配給会社の季節外れの採用情報が目に入りました。日本ヘラルド映画宣伝部で1人募集していました。佐渡には当時映画館がなく、代わりに雑誌の「ロード

ショー」や「スクリーン」を読んでいた。映画は「自分を導く世界へ誘う2時間の旅」。その世界で働くのもいいなあと読んで履歴書を送ったところ、思いがけず書類審査は通過しました。面接で佐渡には映画館がなかったことや特技として書いた「利き酒」が目をつけた。本酒は世代を超えて人をつなぐ」のだと、ルーツに感謝しました。900倍の倍率を乗り越えて採用され、後で社長に理由を聞いたら「君はつづしがききそうだから」。故郷である佐渡と日本酒が導いてくれた内定でした。

担当したのは「氷の微笑」「レオン」などほとんどがハリウッド作品でしたが、1本だけ邦画の宣伝をしました。橋口亮輔監督の「二十才の微熱」で、新宿の劇場での単館上映ということもあり、公開前に監督や主演俳優と一緒にボスターとチラシを持って飲み屋さんを回りました。

1993年9月の初日は朝から暴風雨でしたが、大勢の若い人達が傘をさして劇場を取り囲んでいる様子を見たとき、自然と涙があふれました。大ヒットし、宣伝の醍醐味を感じました。

自由闊達な職場で、挑戦して失敗しても寛容で叱られることはありませんでした。そのおかげで今でも新しいことに挑戦し、諦めない限り失敗ではないと思っています。

(新潟支局長 水庫弘貴)